

戦後皇族論

——象徴天皇の補完者としての弟宮

河西 秀哉

はじめに

敗戦後の一九四七年一〇月、いわゆる伏見宮系と言われる一一宮家五一名の皇族が皇籍離脱をした。それは、敗戦後の「民主化」・象徴天皇制への変化の中で、従来の皇室の規模を経済的に維持できなくなったための措置であった。その結果、天皇・皇后、天皇の子である孝宮・順宮・皇太子・義宮・清宮、天皇の弟である秩父宮夫妻、高松宮夫妻、三笠宮夫妻とその二人の子のみが皇族として残った。

近年、象徴天皇制・天皇像の形成・定着・展開過程の中での皇族の役割についても、研究が進展している。明仁皇太子に関して注目した瀬畑源や河西秀哉の研究、女性皇族のイメージを論じた河西の研究⁽²⁾によって、彼ら彼女らが象徴天皇制・天皇像の定着に大きな役割を果たしたことが明らかとなった。天皇を補完する形で、場合によってはそれ以上に、皇太子・女性皇族が象徴天皇制・天皇像の中で大きな役割を果たしたのである。一方で、天皇の弟宮である秩父宮・高松宮・三笠宮については、近年精力的に皇族研究に取り組んでいる小田部雄次も、基本的にその検討は戦前までが主であり、敗戦後の思想や行動、象徴天皇制の中での役割はほとんど対象としていない⁽³⁾。

敗戦後の弟宮に関する研究の中でとくに注目されるのは、保阪正康による秩父宮の伝記である。保阪は、敗戦後の秩父宮を「開かれた皇室の先駆者」と評価している⁽⁴⁾。また、『天皇・皇室辞典』における高松宮・三笠宮の項目（保阪の執筆）の中で、高松宮を「開かれた皇室」を意識して演出した人物であって天皇家の黒子役、三笠宮を戦前とは一転して学問研究の道を進み戦争を批判した人物と論じている⁽⁵⁾。こうした評価には、より史料的な裏づけが必要となる。本章では保阪の評価を継承しつつ、それぞれの宮ごとに、その役割やイメージについて詳細な史料学的検討を加えながら明らかにする。またその際に重要なのは、弟宮と象徴天皇制・天皇像との関係性を考えることである。つまり、敗戦後に形成・定着をしていく象徴天皇制・天皇像の中で、三人の弟宮が果たした役割を明らかにすることが本章の目的となる⁽⁶⁾。瀬畑や河西の研究で明らかにされたように、敗戦後の皇太子・女性皇族は軍歴がなく、戦争をイメージさせないことに大きな意味があった。大元帥であった昭和天皇では否が応でも戦争を想起させるため、新しく生まれ変わった象徴天皇制ではそうしたことは関係のない皇太子・女性皇族が望まれて受容され、象徴天皇像を形成する大きな要素になったのである。一方、弟宮たちも軍歴を有していた。では、彼らは象徴天皇制・天皇像の形成・定着の中でまったく役割を果たさなかったのだろうか。そうではない。皇太子・女性皇族とは別の論理の中で、大きな役割を担うことになるのである。本章ではその過程を見ていく。

ところで、三人の弟宮の役割については同時代においても論じられている。その中でとくに注目されるのが、ジャーナリストである大宅壮一の評価である⁽⁷⁾。大宅は三人を「天皇をめぐる三つの衛星」と評した。具体的にはそれぞれ、「親しみをもたれた秩父宮」、「自由な空気を好む高松宮」、「市民生活を楽しむ三笠宮」と論じている。大宅は、秩父宮に対しては「天皇兄弟の中で一番気魄のある」と述べ、高い評価を与える。一方で、高松宮に対しては「とりたてていうほどのことはない」、インタビュも「いたって平凡で、個性的なものを感じられない」とかなり低い評価を下している。同時代の大宅のこの評価をどう考え、歴史学として受け止めて修正・再評価するのかという点も本章の目的の一つである。同時代では他に、『週刊朝日』に掲載された朝日新聞記者による座談会にお

いて、闘病生活によって成熟したために「物分かりのいい秩父宮」、「才氣煥発」「理論家」である高松宮、「皇族の『プロレタリア』」「ダダッ児」の三笠宮との評価もなされている。⁽⁸⁾これは、大宅とはかなり異なるイメージであろう。その違いがなぜ生じるのかも考えてみたい。

以上を踏まえ本章では、新聞・雑誌などのメディアを史料として分析する。敗戦後、皇族はメディアへの露出が増加した。本論で述べるように、とくに高松宮は積極的に地方訪問を繰り返しており、その結果として訪問先の地方法紙に彼の動向が多数掲載されるようになる。その中では、全国紙以上に積極的に自らの言葉を発する場面も多かった。地方紙を検討することで、彼らの生の声をより取り上げることができ、結果としてその内面を理解することにつながる。また、病気で地方に出かけられなかった秩父宮は積極的にメディアのインタビュに応じたほか、多くの著作を発表している。こうした記事や著作を丹念に検討することで、弟宮たちの思想にまで検討を深めていきたい。なお、弟宮たちの役割・思想・イメージが象徴天皇制・天皇像の形成・定着にいかなる意味を持つたのかという観点から、本章ではその検討を敗戦直後から一九五〇年代までに限定して論じる。

一 苦悩する「人間」としての秩父宮

(1) 旺盛な執筆活動・インタビュ

一九〇二年六月に大正天皇・貞明皇后の二男として生まれた秩父宮雍仁親王は、一九二〇年に陸軍入隊後、一貫して陸軍に籍を置いた。一九二五年に渡欧し、イギリスのオックスフォード大学にも留学している。一九二八年、松平節子（後に勢津子と改名）と結婚したときは、節子の父である恒雄が爵位を持っていない外交官であったことから、「恋愛結婚」と噂された。一九三七年にはジョージ六世の戴冠式に出席するために夫婦でイギリスを訪問するなど、イギリスとの関係が深く、親英派としても知られていた。秩父宮は天皇のすぐ下の弟として常に世間の注